

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.145
1997.1.25

＝巻頭言＝

外からみた日本の大学改革

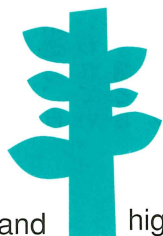
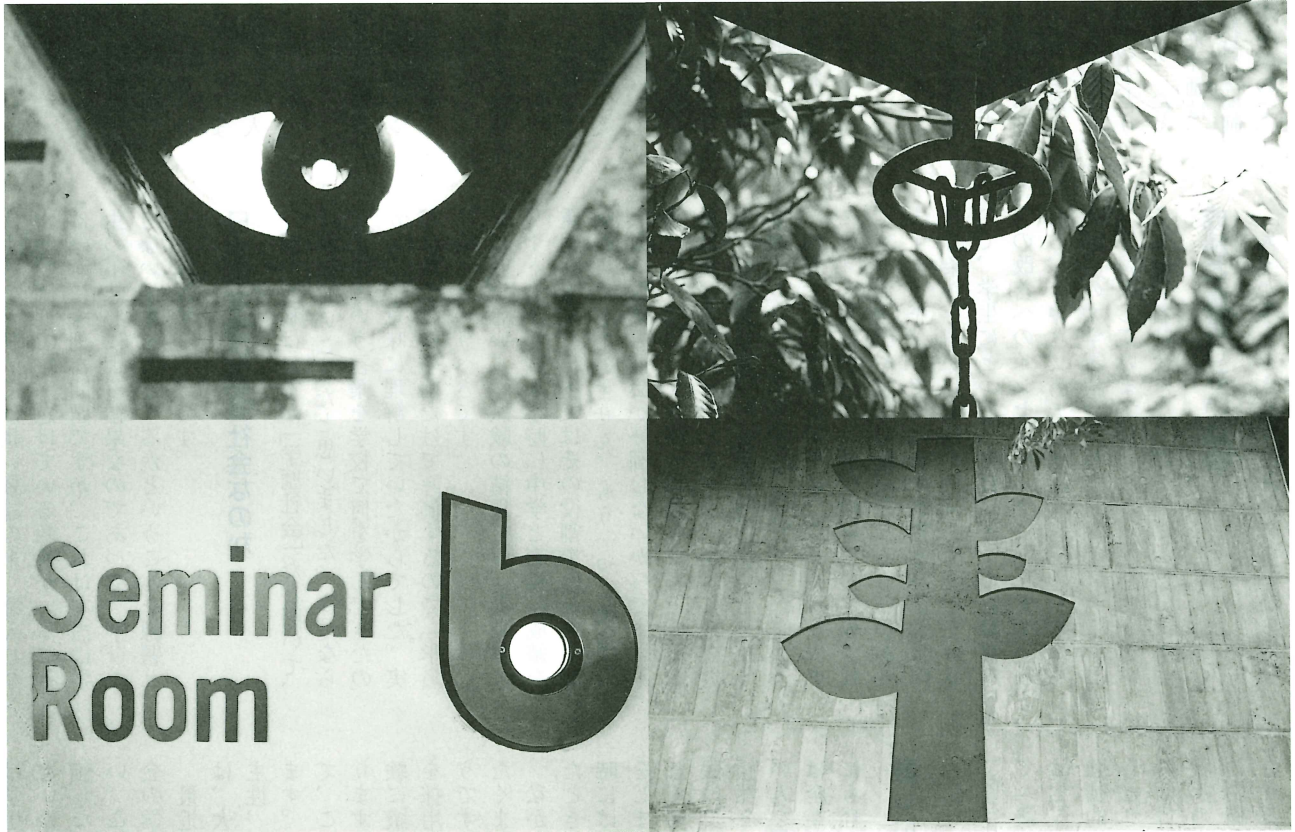
■第12回大学教員研修プログラム
「知」の感動を授業で創る

■第33回大学教員懇談会
大学、改革はしたけれど

■第170回大学共同セミナー

ハリウッド帝国の世界像
—イメージ・ポリティクス—

■業務通信



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

外からみた日本の大学改革

多摩大学学長 グレゴリー・クラーク

教育熱心な日本の大学教員

外国人の目から見ると、日本の大学には良い面が多いと思います。一つには、欧米の大学では先生と学生との接触が少なくなってしまうと、冷たい感じになりました。その点、日本のゼミ制度は家族的な雰囲気を持っていません。コンパから合宿、OB会に結婚式の仲間までフレンドシップが長く続くことは良いことです。

もうひとつは、日本の教員は責任感と教育の熱心さにあふれていて、アングロサクソンの社会よりも教員のプレステージが高いことです。オーストラリアでは、休日を返上してまで教育改革を議論することなど全く考えられません。

しかし、学部の開鎖性、つまらない教授会、学閥や学閥争いは、日本に特徴的な欠点です。また、最近では中途半端な大学院の雰囲気、学生の不熱心、オーバー・ドクター、さらにアメリカで「ミッキーマウス講座」といわれる自動車運転免許の取得を単位認定するようなふまじめな講座、日本はそこまで悪くありませんが、そういう残念な傾向が見られるようになりまし。

大学改革の根本的な問題は

教員の多くが教育を熱心に考えるようになったことには感心しています。しかし、日本ではカリキュラム改革やシラバスの導入などはむしろ二次的な問題で、教育の中身を変えることこそ最も重要だと思えます。しかも昨今の改革や議論には教育が良くなるのかどうか疑問に思える内容も含まれています。たとえば、結果を公表しない学生の授業評価は、教育への効果があるのでしょうか。教員任期制度は、教育に対するマイナス面が多いので、

②

オーストラリアでは長い議論の末、導入しなかった制度です。怠けている教員がいることは確かに深刻な問題ですが、これは本当は学生の不熱心による結果なのであって、学びたくない学生をどうするかということを課題として重視するべきです。

日本は本当に学歴社会なのか

かつて私は日本が「学歴社会」だと聞いて、それは良いことだと思いました。なぜなら「学歴」という言葉を学校で何を学んできたのかという意味に理解していたからでした。実際には大学の名前だけで評価するので「学歴社会」というべきです。

これは悪い入学試験の結果です。英米のエリート大学では入学時に中学と高校の成績を重視します。日本ではその役割をセンター試験が果たしていません。もう一つの理由は、大学の成績を社会が評価しないからです。イギリスではエリート校を卒業しても、成績が悪ければ社会は評価しません。反対に地方大学でも成績が良ければ積極的に評価をします。成績がわかりやすい相対評価になっています。

地方大学の優秀な学生は、たとえばオックスフォードやケンブリッジの学生と比較されても一流企業や官庁に採用されることがあります。イギリスでは政府や教育雑誌が大学の教育条件を細かい項目でランク付けしていることで、学生にとっても社会にとっても教育内容の改善へのインセンティブになります。むしろ、イギリスの方が学歴社会といえます。文部省の大学審議会でもアクレディテーションを議論していますが、こういう制度がないことが学名社会になった一因だと思います。

成績を重視しない社会

大学が学生をきちんと評価しないから社会

は学生の成績を見ない、社会が成績を評価しないから学生は勉強しない、社会が成績を評価しないから大学も学生をきちんと評価しない。この悪循環を断ち切るには、なにより社会の学歴を重視する態度が最も必要です。

最近、財界の教育問題を討議する委員会では、大卒者には将来を担うような創造力、自主性、個性のある人材がいらないといわれています。大学は卒業生を採用してもらって側として、この意見を尊重し反省すべきところもあります。しかし、財界では任期制度と入学試験に議論が集中していて、成績を見ずに学生を採用していることに責任を感じていないようです。日本の経営者の中には、「勉強しないうまくない人が欲しい」と言う人さえいます。

私がオックスフォード大学のボート部にいたときは、試合後にビールを飲んで夜9時には必ず部屋に戻って3時間くらいは勉強をしました。日本ではスポーツをしてコンパして帰ったら「無駄な勉強」はせずにすぐに眠ってしまいます。どちらがたくましいかは歴然としています。それでも企業が成績の悪い人を優先して採用するならば、悪循環の責任は企業にあります。大学教育は企業にも学生にも軽んじられていることになります。

厳しい「人間味のない」大学教育を

もちろん大学にも重大な責任があります。「ゆとり」「豊かな人間性」という理想を止めて「厳しい人間味のない大学教育」を掲げてはどうでしょうか。学びたくない学生には、強制的に圧力をかけて勉強させないと、ちょうどリンゴに虫が入ると全部が腐るように、真面目な良い学生も駄目になります。これは我々の責任です。特に、私立大学では入学金の関係もあって、不勉強を理由に学生を退学させることができません。大学は社会に対し



グレゴリー・クラーク
1936年生まれ。専門は国際経済、比較文化。著書に『国際政治と中国』『日本人ユニークさの源泉』『誤解される日本人』などがある。

て、成績が優秀だった者を高く評価してもらい、怠学者を卒業させても、頭が悪いから自己管理能力がないとわかるような評点を与え、間違った評価をしないようにしてもらわなければならない。これはAからEの5段階評価で相対的評価にして成績をつけ、明らかな怠学者にはEとして、原則としてD以上を評価の対象とすれば可能です。

多摩大学では、この方式によって教員間の評価の甘さのギャップを縮めました。教員がみな同じ基準で学生を評価するという原則に近づいています。やがて多くの大学や企業が協力して、客観的な成績制度を導入した総合評価が出来たらいいと思います。また優秀な学生のリストを公表するのもいい。一極集中の緩和、学生の勉強意欲の向上につながり、本当の学歴社会になると思います。

やる気にさせる授業法

私は学びたくない学生に対しては、必ず授業に出席しなければならぬコースとそうでないコースの二つを設けています。出席しなければならぬコースでは、宿題の本を読まないでパスできないようにし、毎週小テストを5分間するようにしています。しかし、準備すれば良い点数が取れて、期末試験も授業の感想と本一冊の報告だけです。ちなみに名前を呼び始めた瞬間にクラスの雰囲気は崩れて、私語が始まるので出席はとらないようにしています。

出席しなくてもよいコースでは、年4回の面接を持ち、期末テストで1年間の授業内容と宿題を試験します。悪い学生でも、大学に来るようになり、毎週本を読むという雰囲気は圧されて、学問の刺激や喜びがわかってきて変わるのではないかと考えています。それから、私が上智大で教えていたときに

成功したアドバンスト・リーディングというコースを多摩大学でも始めてみました。上智大の留学生が日本語の文章を読めるようになるために、経済白書を毎週タイプに15ページくらい吹き込んで配り、それを翌週に全員の前で順番に読むという方法を採用しました。準備しなければ馬鹿にされるので、彼らは勉強して3ヵ月後には全員が自由に読めるようになりました。

そこで、多摩大学でも1回に400語程度の英語による時事問題を学生に強制的に聞かせ、1週間で解説させています。まだ実験段階ですが、平均宿題時間はゼロから2時間になりました。もちろん教科書を使って文法の学習も必要に応じて行なっていますが、聞く能力は実は自由自在に原書を読むための基盤となります。

英語を入試科目から外したい

制度の手直しとしては、入学試験の改革が必要で、多摩大学では、入学試験から英語を廃止しようとしたことが、受験生集めでずるいと言われました。結局、文部省に不満があつて選択科目になりましたが、数学を必須科目にしようとしたことから受験生集めが狙いではないことがわかりと思います。

もちろん入学時点で英語ができる方が望ましい。しかし、学生を振り落とすための記憶力テストは、むしろ英語アレルギーや英語を使えない若者を増やすばかりです。大学では、誤った教育を受けた学生を修正するよりも、簡単な教育を受けた学生を本格的に教えた方がよい。実際、英語の必修単位を4単位から8単位にして重視しています。

また理工系離れの現象は、日本の将来のためだけでなく学生の考える能力とも深く結びついています。入学試験は理数系科目を増

やして頭の体操ぐらいにした方が、日本の将来にも学生にも役に立ちます。創造力を強制的に作るのには難しいことですが、理科系を教育の中心にするべきです。文化的な問題が背景に横たわっているとしても、今の入学試験がそれに逆行する教育制度であることは間違いありません。

学部のダブル専攻制

今後も学部教育の「工場化」は必至です。それに対処するには、優秀な学生は大学院に飛び級させて専門教育を行ない、学部ではダブル専攻制度を導入するのが良いと思います。日本の大学は、経済学部では経済学者を育てるといのが基本方針になっています。しかし、実際には全体の5%が学者になれば十分です。多くの学生は経済学の原理原則さえわかれば良く、むしろアメリカのようにダブル専攻制度を導入して、専門にプラスして、地域研究の枠の中で外国語と政治経済、文化全体を学ばせた方が学生の将来にとって有効です。

特にバイリンガルの帰国子女が教養英語を受講するのは、無駄で不公平です。ダブル専攻で語学を活かして政治や経済を学ぶ方が学生にとって有意義です。アメリカでは、外国語教育を18歳から始めて、2年間の集中的な学習で上達させます。日本も英語アレルギーの被害者を増やすより、中等教育の英語の授業内容を簡単にした方が良いと思います。

とにかく大学改革は、教育の向上を中心に具体的に一人一人が工夫していくこと、そして学生の能力を正當に評価する学歴社会を目指すしていくことが大事だと思います。

(文責・編集者)

「知」の感動を授業で創る

▼講演

「璞」の魅力―これからの学生―

東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢氏

▼提題

A 私語問題を考える―授業改善の契機として―
武庫川女子大学教育研究所助教 島田博司氏

B 多人数教育と「知」の感動の可能性
中央大学商学部教授 建部正義氏

C 「私語なき授業」のための5カ条
立教大学経済学部助教 山口義行氏

D バークレー校から学ぶ授業改善と評価システム
東海大学理学部教授 安岡高志氏

【参加者】65名49校（講師・運営委員を除く）
国際基督教・藤田保健衛生・防衛大学校（各3）、共立女子・東海・東京女子・東京薬科・日本・常磐・亜細亜・東京家政学院・麻布・聖和（各2）、電気通信・東京外国語・室蘭工業・東京商船・大妻女子・工学院・芝浦工業・上智・中央・東京工科大学・東京学芸・明星・東洋英和女学院・北海道医療・国際医療福祉・聖徳・国立音楽・恵泉女学園・白百合女子・聖路加看護・創価・玉川・神奈川工科大学・日本福祉・同志社・大阪医科・摂南・神戸

学院・広島工業・広島電機・松山東雲女子・福岡歯科・活水女子・九州大学医療技術短期・長崎大学医療技術短期（各1）、他（1）

◆ 来年（'97年）の春から新教育課程で学んだ卒業生を大学は新入生として迎える。いわゆる新学力観に基づいた生徒の興味・関心・態度を大切に学習は、どんな生徒を生み出しているのだろうか。学習の場が個性に応じて活性化したといわれる一方で、従来通りの体系だった学習が困難になったという声も聞こえてきている。

18歳人口の減少期に入った生徒は、いわゆる「やる気」に欠けていて、そこそこの成績に甘んじる傾向も見られる。大衆化した大学には、「私語問題」に象徴される「学びの場」の危機といえるような状況が生まれている。

「やる気」に欠け、従来型の体系だった学習習慣のない高校卒業生が大学に入學してくるとしたら、大学教員はどう対処すればよいのか。

◆ 昨今の大学改革によって、多くの大学ではカリキュラムの改編がなされた。しかし、カリキュラム改革で大学の授業が

④

学生にとって意味のある場に変革されたと見えるだろうか。ひとつひとつの授業が十全になされてはじめて、カリキュラムが生きてくるものなのである。

◆ 今回のプログラムでは、今日の学生の現状を見つめ、学生にとっても教員にとっても、大学の「知」の感動を味わえる場をどう作り上げていったらよいのかをめぐって研修した。

◆ まず冒頭、宮腰氏は講演のなかで、来年度入学してくる学生は「璞」の魅力を秘めていることを強調された。かつての新入生は、受験勉強に疲れて学習意欲に欠けたり、暗記中心の学習から思考する学習への転換ができなかった。それに比べれば、新課程で学んできた学生は、受験競争も厳しくなく手つかずのまま、より多く可塑性を持つて大学に入學してくる。大学教員の技量次第で璞の学生を玉石に磨き上げる可能性を秘めているのではない。

◆ 続く提題では、私語問題についてユニークな発言をしている島田氏が、学生の私語の原因は退屈で無益な授業をする教員にも一因があるので、教員は学生

の私語を授業の点検・改善の契機として受けとめるべきではないかと問題提起された。



私語をなくし、「知」の感動を体験させるには、また動機づけに乏しい学生を引き付けるにはどのような授業の工夫が必要かをめぐって研修した参加者と講師——ようこそ広場にて

次に建部氏は、学生との接触が少ない
大人数教室の講義のなかで学生の学習意
欲を高めるためにはどうしたらよいかを
めぐって、氏自身の大教室での講義の経
験と学生の授業評価などを紹介した。

三番目は、私語をさせない授業で定評
のある山口氏が、私語のない授業ができ
るようになった過程をさまざまな経験と
試行錯誤に触れながら紹介された。氏の
講義への熱意と努力、そしてオリジナリ
ティは多くの参加者に感銘を与えた。

最後の安岡氏は、カリフォルニア大学
バークレー校がまとめた授業改善の具体
策と、そのための授業評価システムを紹
介しながら、アメリカの教員が教育に熱
心な背景には、教育業績の評価のシステ
ムがあることを明らかにし、日本でも同
様の教育評価が必要であると指摘され
た。

なお、今回は分科会を第一夜と第二
日午前に設けて少人数による討論と意見
交換の充実を図ったが、折からの台風の
到来によりプログラムを第二日午前で中
断せざるを得なかった。

授業は学問への 入口に過ぎない

国際基督教大学準教授 磯崎三喜年

各セッションの講演、提題いずれも興
味深く、迫りくる嵐にするものぞの感
があった。また、互いに専門も事情も異

なる様々な大学の方々との率直な意見交
換は収穫であった。

授業は、双方向的なコミュニケーション
でなくてはならない。教師と学生は、
本来授業において同じ時間と場を共有し
ている同一カテゴリーの成員だからであ
る。また、双方がその意識を共有すれば、
魅力と関心の高まりから学生のより主体
的な授業への取り組みや、教師と学生の
相互作用も期待できる。さらに、我々が
十分に説明したつもりでも必ずしも意図
した通りには学生に伝わらないが、それ
は学生の理解度を知る機会や思わぬ発見
をもたらす。

また、教育には授業以外の多様な関わ
りも大切である。もとより授業は、学問
への入口に過ぎないとすれば、教育技術
ばかりでなく、大学の構成員が相互にと
だけ接触できるかも、教育の成否を規
定するであろう。

成長期の学生を いかに方向づけるか

東京女子大学助教授 真覚 健

今回の研修に参加して、我々がいま抱
えている問題は、どのように学生たちに
大学の役割や学問の存在意義を示すべき
かであると強く感じた。それは大学教員
にとつて自明であるはずだが、学生にと
つて自明なものではないことが授業にも
深刻な影響を及ぼしている。

研修会では、学生の私語が社会問題で
あるという観点で論じられた。嫉のレベ
ルだけでなく、学生たちにとつて大学の
授業がさほど重要ではないということが
背景にあるという指摘があった。

いうまでもなく、授業は学生と教員と
の関わりの中で成立する。学生に迎合す
ることも、旧態然とした大学や学問の存
在意識を一方的に押しつけることも、問
題を解決しない。では、学生に対してど
のような存在意義を提示したらよいの
か。

かつて前任校で学生相談員をしていた
ときに、大学の授業への不満を訴えにき
いた学生は、高校や予備校のような授業を
期待していた。学習意欲が出ないと訴え
た学生たちには、他者からの評価や具体
的な成果を強く求める傾向が共通してい
た。彼らの要望に応えることは難しくは
ないが、それに応えることが解決策とし
て好ましいかどうか。

また、成長途上にある学生たちをどの
ように方向づければよいのかは重要な問
題である。学生は本来未熟な存在なのだ
が、近年、幼児化の傾向は顕著なものに
なっている。大学において、学生の躰ま
でせざるを得ない状況である。ひと昔
前、スチューデント・アパシーが問題化
した。その背景には、本業での評価を恐
れる脆弱な自尊心があった。具体的な評
価や資格取得を重要視する昨今の学生の
特徴とアパシーの学生には、共通性はな

いだろうか。あるとすれば、安易に学生
の希望に沿うことは、人格形成にネガテ
イブな結果をもたらしかねない。

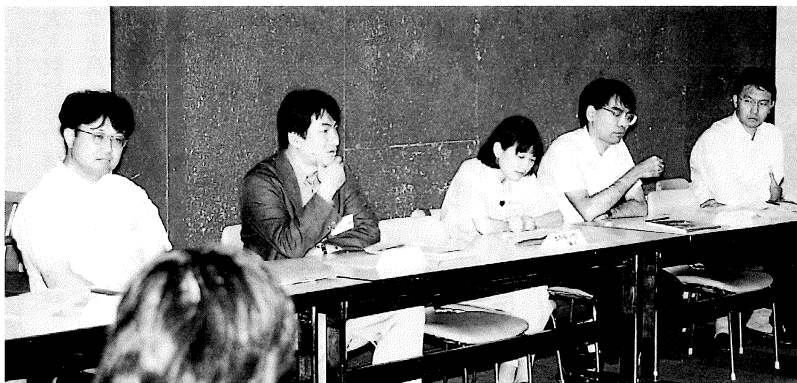
大学や学問は学生にとつてどうあるべ
きか、学生の成長をどのようにサポート
したらよいのか、この宿題の答えを求め
て、試行錯誤の日々が続くだろう。

たこつぽ状況を 乗り越えるためのFD活動を

広島電機大学教授 土屋英司

仕事の持続と発展のためには、Plan-
do-checkのサイクルが欠かせない。しか
も螺旋状にサイクルを描く、すなわち進
歩を続けねばならない。私が勤めていた
企業の研究所では自らはもちろんのこ
と、組織としてもこのPlan-do-checkのフ
ォローが厳しかった。

教育におけるPlan-do-checkは、「シラ
バス」授業の実施―学生による授業評価
ならびに教授法の再検討」と表現でき
る。私が勤務する大学では、九三年四月
からシラバスを発行した。当時教務委員
長として他大学の調査もしながらシラバ
スの表現内容をどのレベルにするか苦労
した。また、情報処理教育関係では授業
方法の研究が比較的活発で、機関紙も発
行されているが、一般的には表立った動
きはない。学生による授業評価は、一部
の教員や有志数人によるグループで独自
に実施している程度で、組織全体に広げ



分科会での討論風景

るにはまだ時間がかかる。これが私の大学の現状である。

大学に転じた際の最大の驚きは、縦にも横にも連携が希薄で競争社会では考えられない運営が行なわれていることであった。もちろん教員の自主性の尊重は重要だが、たこつば主義がまだまだ横行している。しかし、このプログラムに参加して、教育の現状に憂いをもつ方が多数おられるのを心強く感じた。『大学は変わる』と『続・大学は変わる』は読んで

いたものの頭の中だけの存在に過ぎなかったセミナー・ハウスが身近な存在になった。

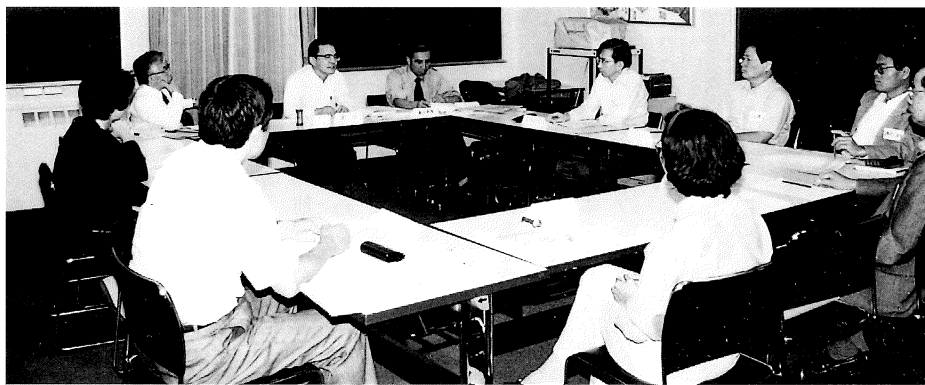
企業では20年ほど前からファミリー・トレーニングと称する制度を導入して、一泊二日程度の時間をかけて部署単位で自己が属する組織の問題点を討議している。数人のグループに分かれて一つの問題を議論するなかで、アルコールを入れて議論を活発にしたり、生真面目にKJ法で問題を者詰めしたり、グループごとにさまざまな状況が展開される。そして最後にグループ単位の発表を行なう。私も何度かこの経験があるが、今回は宿泊研修がもつ魅力（魔力）を想起させていた。

我々の大学でも、九四年度からFD推進委員会が発足しており、私もその運営に参画している。現在、前述の plar-do-check に該当する討議テーマをあげて月1回の頻度で会議を開いている。今後は、大学セミナー・ハウスでの体験を本学のFD活動にいかしていきたい。

大学でどういった人間を育てるか

活水女子大学教授 井上大衛

私はフレッシュマンセミナーという科目を担当している。1年次学生のために主に大学生として「語る・問う・議論する」を訓練している。私の知る限り、他



分科会での討論風景

性の形成に寄与する学習が後回しにならないだろうか。

最近では、大学でも技能習得・資格取得のためのカリキュラムを大学間で競って用意している観すらある。就職活動の時点では技術や資格を持っていることで有利になるだろう。しかし、職場の現実も果たしてそうだろうか。

大卒で資格を持っていても役にたっていないという例は、増えているともいわれる。その原因は、「気が利かない」の一言につきる。気が利かない人というのは、多くの場合そのことに気がついていないが、自覚的に努力すれば誰でも「気が利く人」になれる。

気が利くということは、少し大きさに言えば他者に対する主体的な共感と言えよう。あらゆる職場で、働くときに気を利かせなくては、相手の役に立たない。サービス精神を欠いている者には、本当の「仕事」ができないだろう。資格不要のこの資質を欠いては、どんな資格も技術も活かすことはできない。つまり、人材を育てるといふ大学の役割は、「気が利く」といふ資質を育てなければ果たしたとは言えないのである。そして、そのような資質を育てることが大学教育の要であれば、当然、何よりもまず教員にその資質が求められているのではないだろうか。

の国々の大学生に比べて日本の大学生は一般的に「語る・問う・議論する」能力が遅れていて、日本の教育は本質的に未だに「読み・書き・そろばん」の域を脱していないと思うときさえある。こうした技能習得を主な目的とした教育では、どうしても「語る・問う・議論する」の練習は後回しにされる。それでは、主体

大学、改革はしたけれど

▼講演

外からみた日本の大学改革

多摩大学学長 グレゴリー・クラーク氏

▼提題

1 大衆化した学生たち

法政大学社会学部教授 中野 収氏

2 大学教員任期制のねらい

大学審議会室長 合田隆史氏

3 京都地域における単位互換事業の現

状と課題

京都・大学センター主任 森島朋三氏

4 学問像の再構築へ向けて

九州大学大学院比較社会文化研究科教授 吉岡 斉氏

【運営委員】

千葉大学理学部助教授 秀島武敏氏

東京工業大学理学部教授 北原和夫氏

東京学芸大学教育学部教授 並河一道氏

武蔵工業大学工学部教授 安田忠郎氏

東京大学教養学部教授 平野健一郎氏

【参加者】44名28校（講師・運営委員は除く）

東海（4）、防衛大学校（3）、電気通

信・国際基督教、芝浦工業・中央・東京

理科・日本・武蔵工業・中部（各2）、東

京医科歯科・福井医科・滋賀県立・大妻

女子・桜美林・杏林・慶応義塾・上智・

東京女子・日本女子・文教・明海・亜細

亜・大東文化・東京経済・東京工芸・神

奈川・神奈川工科・新潟産業・大学教育
研究所、他（各1）



教養部の改組・解体、カリキュラムの改革、自己評価・点検、シラバスの作成、大学院の重点化など大学改革は着々と進んできたようにみえる。しかし、今大学教員が感じるこの徒労感、無力感は何なのだろうか。

改革の結果増えたのは、授業負担と会議そして社会からのプレッシャー感だけのように思われる。社会の要請に答えようとする改革だったが、大学、学問、教員、そして何よりも学生への配慮が不足していたのではないか。

大綱化によって、四年一貫教育となった結果、実際には一般教育が軽視・縮小され、専門教育も大学院の充実など目標を向けがちで、学部教育全体の見直しはまだ先になりそうだ。

いままです諸悪の根元を教養課程に押しつけてきたその原因がどこにあるのかはつきりしてきた。いくら組織の改変、カリキュラムの改革が進んでも教員の意識が変革されなければ何もならないだろう。

また学生の気質の変化に対応すること、大学改革を進める上で重要な要因で

ある。今日の学生の多くは明確な学問への目的・動機を持たず、探求心、学習意欲を欠き、ただなんとなく大学生活を送り、四年生になると就職活動に飛び回るのが現状である。

今回の懇談会では、始まったばかりの大学改革のなかで、大学教員が感じている徒労感、無力感をどう克服し、大学全体を活性化するためにはどうしたよいかをめぐって議論することであった。ここの議論の詳細は、目下編集集中の記録書を参照していただきたい。



前列右より吉岡・合田・岡（館長）・クラーク・中野・森島の各氏
——ようこそ広場にて

懇談会に参加して

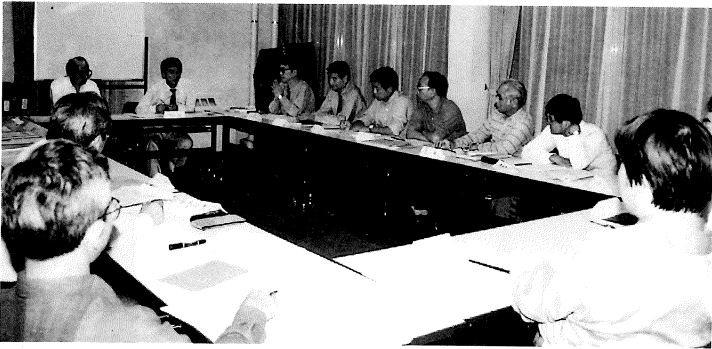
異分野との接触が創造性を育てる——単位互換制のメリット——

東京工業大学理学部教授 北原和夫

単位互換による大学間の学生交流は、学生の視野を広げてゆくに重要であり、また、異分野との接触が創造性を育てるところから日本の文化の発展に寄与するところが大い。そのような観点から、現在いろいろな大学や大学院で行なわれている単位互換の試みについて、この分科会で情報交換できたことの意味は大きかった。

特に、京都市における公私立大学間の単位互換について、質問と議論が集中した。33大学の参加という大きなスケールでの単位互換が推進できたのは、参加大学の学長のリーダーシップによるところが大きく、また単位互換の目的を明確にしたことが力となったということである。すなわち、自大学に無いものを求めて、相互に補充しようということである。その結果として、教官・学生の相互評価となり、大学は活性化するわけであるが、それはあくまで結果論であって、大事なことは、学生にとって何が必要か、という観点である。現在のところ、文科系科目が主であるが、理工系に拡大することも当然考えられている。国立大学間でも小規模ながら、単位互換が行なわれていて、特に大学院レベルで特色ある講義に他大学の学生が聴講して効果をあげている（東工大、総合大学院大学等）。その際、集中講義型、夏の学校型が有効である、と報告された。

同じ学内でも、学部やキャンパスを超えた相互履修は履修の選択の幅を広げるために重



誰が、どういう観点で教員評価をするかによって、任期制には悪い面も出てくるのではないか——「大学教員任期制のねらい」をめぐって議論する分科会

要である。特に、全国にキャンパスが広がっている大学では、学内の学生交流をどのように行なうかを議論して、単位互換の動きに関心をもっている。東京の女子私大間で教育面の教育提携を始めて、関西の同じ動きとも連携することを考えている。遠隔地の場合、双方向のマルチメディアの使用、学生の国内留学などが考えられる。

地方の単科大学ではどうしても幅広い教養科目を立てることができない。周辺の私立大、公立大との単位互換を実施したいが、国立大と公私立大との間の授業料徴収のことがネックとなっている。京都でも国立大との間の交流が進まない原因の一つにこの問題がある。

この問題については、その後、文部省は単

位互換協定に基づく双務的學生交流については、公私立大學生に対して国立大学の授業料を徴収しない方針を決定した、ということである。これを機に學生交流がさらに進むことを期待したい。

誰が、どういう観点から 評価するのか——任期制の課題——

大妻女子大学教授 田辺和子

多摩大学学長のクラーク氏の外国人の目からみた日本の大学批判はたいへん新鮮でした。日本は学歴社会ではなく、学名社会だ、大学で勉強をしないのは自己管理できない精神的なたくましさがない学生という意見にはわが意を得たりと感じました。学生の甘えを許すのは社会の問題だけではない。大学教員の側ももっと厳しく教育に当たらねばならないと思います。

今回一番話題になったのが大学審議会室長の合田氏の大学教員任期制でした。任期制は若い人の研究意欲を促進し、研究交流を活発にするという点、また沈滞化した大学教員の研究意欲を喚起する点では、たいへん有意義な制度で、そのために考え出されたものと思われれます。ただし、現状では大部分の私学には大学教員は研究なぞするな、教育義務だけ果たせばよいという風潮があり、そのためか研究能力の優秀な人にきてもらっては困るという考えをもっている教員が少なくありません。任期制を導入した場合に、誰が、どういう観点から教員を評価するかによって明るい良い面ばかりでなく、逆淘汰のようなことが起こる心配もあるのではないのでしょうか。それが気がかりです。

今、開かれた大学とかいうことでこの大
学でも市民公開講座を設けていますが、毎年
講師の人選とテーマで苦労して、その結果は

⑧

似たような教養講座の羅列です。京都の大学の単位互換制は、むしろこのような形で他大学の学生と一般市民を巻き込んだ形での公開講座の方が、各大学の教員の負担も軽減するし、はるかに社会に貢献することになり意味があると思います。関東の場合、地域が広く大学が散らばりすぎて困難でしょうが、たとえば多摩地域とかに限れば同様の取り組みができるのではないかと思います。

他の先生方のお話もとても面白く、わが身につまされることばかりでした。今回の懇談会は、21世紀に生き残る大学のあり方を考える良い機会を与えてくれました。

個別学問の枠を超えた 新しい学問像の形成を

東京学芸大学教育学部教授 並河一道

科学技術および学問全般の、国家的な推進目的の消失と産業的な推進目的の衰退とを主な要因として、学問目的の喪失という歴史的状況が生じ、その結果、だれのための学問か何のための学問かという、学問への問い直しの視点が大学教員に求められるようになった。この視点を欠いては大学改革の方向を打ち出すことはできないという吉岡氏の問題提起を踏まえて、第4分科会の討論が行なわれた。

最初に、これまでの大学改革では、建前としてはこのような目的を標榜していたが、本質的には学問について問われることはなかったこと、および大学に求められているものは、困難な問題に対する助言や、外に何を与えられるかの視点であることが、吉岡氏から補足された。これに対し、工学の分野では進歩拡大の歴史観の変化に対応して、新しい科学技術の必要性が認識されており、工学の役割と性格に変化が生じてきたという発言があり、その実例が示された。

また、内外の情勢変化に対応する変革が大
学活性化の戦略として、研究テーマや研究の
性格に反映されてきたのかという発言もあつ
た。これらの発言は、一方が学問研究の存在
意義の変化を問題にしているのに対し、他方
が学問研究の内容の変化を問題にしており、
議論がなかなかかみ合わなかった。

ここで、「何のための学問か」という問いの
発生の起源に対する質問があり、この問いが
注目されてきた科学的な背景に関する説明
があつた。さらに、このことは科学の論理へ
の問いにつながるものであるとの説明がなさ
れた。このことに関し、教養教育の意義は自
分の枠組みの外から見られるようになること
であるとの発言があり、これまでの改革は個
個の学問の論理の枠内での改革であつた点が
指摘された。

また、学問には自己の規範を越えてその価
値を問うことが必要とされ、学問の中に全体
を見ていく視点が位置付けられなくなるとそ
の学問に限界が生じてくることが、経済学の
実例をあげて指摘された。また、社会には、
多様な思考のできる学生への期待や、知的創
生型の教育への要望が存在するという発言も
あつた。これに対し、新しい工学の大学では
このような視点を取り入れるため、広い視野
からカリキュラムを編成しているとの発言が
あつたが、自己の規範を乗り越える論理を持
つことと広い視野の教養を持つこととは必ず
しも一致することではないように思えた。

この分科会では議論されなかつた「学問の
新しい方法」の模索とともに、新しい学問像
が形成されねばならず、自己の規範を越えて
学問の意義と価値を問うことを基本に据えて、
各々の学問分野において新しい学問理念を生
み出すことが大学改革の新しい課題として浮
上ってきたように思われる。

ハリウッド帝国の世界像 ——イメージ・ポリテクス——

▼主題講演

東京経済大学コミュニケーション学部教授
桜井哲夫氏

▼シンポジウム（講義と演習）

I デイズニールランド都市の政治学
——環境化するハリウッド帝国——

東京大学社会情報研究所助教
吉見俊哉氏

II ハリウッド映画に見るアジア人の肖像
ノンフィクション作家 村上由見子氏

III 太平洋・ハワイ
——楽園幻想とハリウッド南洋映画——

東京経済大学コミュニケーション学部教授
山中速人氏

IV なぜ西部劇はメキシコ人を罰するの
か——文化関係の構図とその原理——

茨城大学人文学部教授 落合一泰氏

V ハリウッド映画とヨーロッパ
——アメリカのへ内なるヨーロッパ——

東京経済大学コミュニケーション学部教授
桜井哲夫氏

【運営委員】
東京経済大学コミュニケーション学部教授
桜井哲夫氏

東京経済大学コミュニケーション学部教授
山中速人氏

東京大学社会情報研究所助教
吉見俊哉氏

【参加状況】 59名24校

東京経済（15）、早稲田（6）、成蹊・立教（各3）、筑波・一橋・共立女子・国際基督教・上智・東京女子・日本女子（各2）、埼玉・千葉・東京外国語・横浜国立・茨城・上越教育・東京都立・慶応義塾・成城・聖心女子・法政・明治・明治学院（各1）、他（5）

ハリウッド映画は、今も昔とかわらず映画の世界を席卷していて、これを「ハリウッド帝国主義」と呼ぶ映画人もいる。かつて日本でも HOLLYWOOD に「聖林」という字をあてた人がいたが、それはそこを映画の聖地とみる見方があったことを物語っている。

しかし、その歴史をみれば、映画もまた時代の枠に縛られ続けてきたことに気づく。たとえば、アジア人は、これまでの映画の中で偏見に満ちた描かれ方をされ続けてきた。デイズニール映画においてもまた同様である。また、「夢の楽園」ハ

ワイも、実はハリウッド映画が作り出した南の楽園イメージのなかから生み出されたものである。映画の悪役にしても第二次世界大戦中は日本人やドイツ人であり、戦後はKGBのロシア人であったのが、今では麻薬供給地帯に住む南米の人

人や、反米的な国があるアラブの人々になっ

ている。これによって、ハリウッド映画がアメリカの世界観や他民族観、イメージを知るための貴重な資料にもなっている。セミナーはハリウッド映画を見ながらの世界史の講義を通して、学生に新しい映像観を提供することになった。

まず、吉見氏は戦前の代表的なアメリカナイゼーション論と戦後日本のアメリカ文化の受容過程を解説した。その上でデイズニールランドの空間構造やデイズニール映画から植民地主義的言説を抽出し、現代日本社会の繁華街の開発や若者の意識に見られる「デイズニールランド化」を指摘した。さらに氏は、日本の文化的文脈による先の植民地主義的言説の再構築化および再生産について言及しながら構造転換する「日本のアメリカ」を論じた。

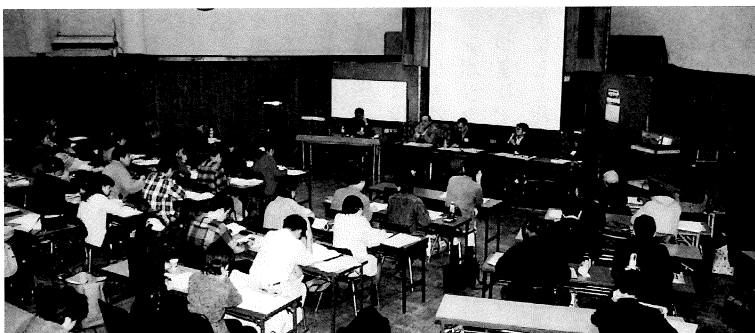
次の村上氏は、草創期から太平洋戦争中、そして最近までのハリウッド映画におけるアジア人像を多くの貴重な作品を見ながら解説した。とくに白人の扮する中国人「フー・マンチュウ」や戦時中の対日プロパガンダ映画は、他民族を峻別する表現を超えたステレオタイプ化の実態を明らかにした。

そして、落合氏は「夕陽のガンマン」と欧米の古い文献や絵画を見比べながら、メキシコ人の悪役としての描かれ方を文化関係論の立場でジェンダー論などの手法を用いながら論じた。

さらに山中氏は、ユーモアを交えなが

ら白人によって作られたフラダンスが先住民の文化として商品化されていく過程を映画で追うことで、「楽園ハワイ」のイメージとハワイの現状とハリウッドの映画産業の関わりを分析した。

最後に桜井氏は、「カサブランカ」や「大人は判ってくれない」などの名作を通して、アメリカがヨーロッパをどのように見ているのかを指摘しながら、他者への視線がどのような文化関係によって成り立っているかを明らかにした。



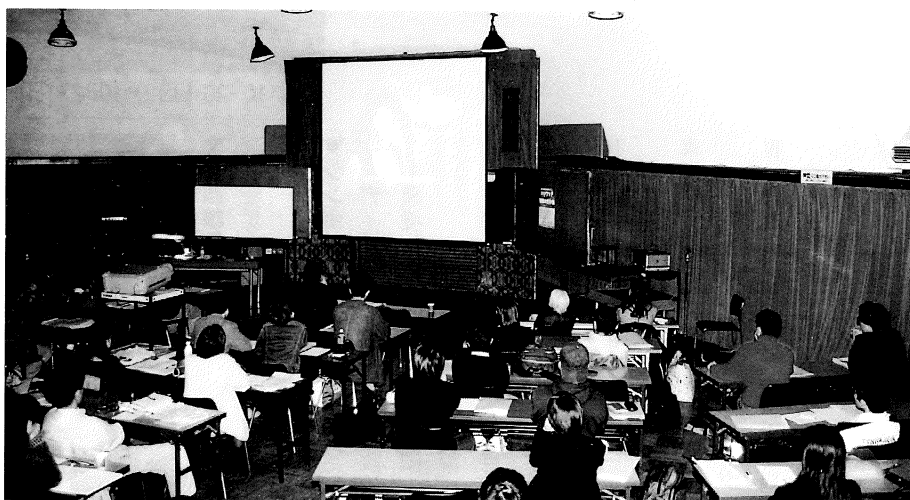
正面左から桜井・山中・落合・吉見・村上の各氏をパネリストに議論する参加者たち

参加者の感想から

ハリウッドの「まなざし」が 問いかけるもの

日本女子大学4年 三品裕美

私自身の研究テーマとかなり重なりのある問題設定がされていたので、充実したセミナーとなることを期待して参加し



劇場さながらの大画面に写し出される貴重な映像を見ながら、白熱した討論が展開された——講堂にて

たのだが、実際「充実しすぎ」と思うくらいの中身が濃く、頭も目も耳も、そしてノートをとる手もフル回転の状態だった。

各シンポジウムでは、5人の先生方がそれぞれの視点から、具体的な素材を用いつつ、表象のあり方やイメージのつくられ方、そこにはらまれる文化間関係や認識のあり方などの問題に鋭く切り込んで、とても聴き応えがあった。また、最後の総括討論では、学生の側からも、問題の核心を突くような質問が出て、今回のテーマに対する参加者の側の関心の高さがうかがわれた。それから、真夜中の自由な雰囲気の中のディスカッションでも、それぞれ先生方をつかまえて様々な意見交換を行っていたようだ（かなり遅くまで付き合ってた先生方には心から感謝している。翌朝も元気に討論を続ける先生方のバイタリティには頭が下がった）。

セミナーを通して考えさせられたことはたくさんあったが、特に私の関心のツボにはまっている問題をふたつ挙げておきたいと思う。まずは映画というテキストが一般の大衆にどのように読まれたのか、そしてその際にうけとったイメージが、どのように、どの程度、人々の認識のあり方・態度・行動・ふるまいを決定づけていくものなのか、という問いである。つまり、ハリウッドの「まなざし」によってたちあらわれた表象の数々をへみるという経験を通して、どの程度人々はその「まなざし」を自分のものとしてきたのか、そしてそれによって実際どのような経験が産み出されていくのかという、フィクションとリアリティとの関係

性の問題である。

もうひとつは、表象の善悪の問題である。私自身は、文化の描かれ方の中に序列意識が入り込んでいる場合、そしてその表象のあり方が描かれた側に劣等感・被差別感や不幸な経験・不利益をもたらす場合、その表象は問題にされるべきだと思っている。しかし、その線引きや判断自体が、非常に微妙で難しい問題であるし、判断を下そうとする際も、どのような立場からどのようなことばで語ろうとしているのかという問いを、たえず自分自身に投げかけていく必要があるだろう。さらに言えばそれは、今現在（ハリウッド帝国）をこのように分析・記述している私たち自身が立つ位置を確認していくことにもつながっていると思う。

（現代社会専攻）

まったく異質の映画鑑賞の方法に触れて

東京外国語大学3年 深井 啓

ハリウッド映画が大嫌いな私にとつて、今回のセミナーに参加する目的は、ハリウッド的世界の画一化・全体化を批判的に暴き出すことにあるはずだった。例えば「シンドラーのリスト」が、にわかにはヒューマニストを大量生産してしまつたのはなぜだろうか。そして、モンゴルの首都ウランバートルで一番はやっているデイスコの名前が「ハリウッド」なのはなぜだろうか。こんな素朴な疑問をすつきりさせたい、というのがこのセミナーに参加した目的だったのだ。

しかし、こんな当初の目的はシンポジウムが進むにつれて希薄化していつてし

まった。というよりも、むしろこのセミナーは私のこれまでの映画の付き合い方とは全く異質の「映画鑑賞」の方法を提示するものだったと言えよう。

さて、このセミナーに一貫して流れていたのはハリウッドを一つの記述として捉えるという姿勢であった。ハリウッドを単なるイメージの生産工場とみなすのではなく一人の人物と見立てて、その記述を分析していくことによって、「彼の」「異文化」の認識方法を露呈させ、そしてさらには我々自身の他者へのまなざしを自己反省的に再確認するという作業が各シンポジウムを通じて行なわれた。

つまり、ハリウッド映画の大袈裟さの前にした我々は、我々自身の認識の限界（＝避けることのできない「ステレオタイプ化」）に気付かされる。そして、他者や自分自身に対してすら向けられる、この「ステレオタイプ化」という習性に気付かない限り、我々は決して帝国主義、全体主義的な視点から逃れることはできないだろう。

良い悪いは別にして、今や世界化したハリウッドに存在意義を見出すとするならば、それは単なる娯楽装置として人々に安らぎを与えるということではなくて、人間の認識の限界を否応無しに我々の眼前に提示し、世界との向き合い方を模索し続けるよう執拗に我々に迫ることではないだろうか。

こんなふうに、今回のセミナーを通してハリウッドとの、そしてさらには他者との向き合い方を私なりに再検討することができたのは、意外ではあったものの大きな収穫だった。

（モンゴル語専攻）

平成8年度
諸規程改正検討作業部会

●第7回'96年9月5日、第8回'96年9月30日
成蹊大学

【出席者】(委員) 宇野重昭、(法人) 佐野博敏
理事長、岡宏子館長・専務理事

●各回の主な議題

ハウス就業規則・同附則改正部分の再点
検・確認。

平成8年度
第2回常務理事会

'96年11月11日/アイビーホール

【出席者】(常務理事) 有馬朗人、小山宙丸、宇
野重昭、中嶋嶺雄、絹川正吉、(法人) 佐野博
敏理事長、岡宏子館長・専務理事

●主な議題(報告と協議)

ハウスの諸活動に新しい展開を図るための
諸方策―「大学教育のための連合体センター」
(仮称)構想導入の可能性。①単位互換制の積
極的推進、②大学教員研修(FD)プログラ
ムの一層の充実。

ハウス経営上の諸問題―①施設の現状と近
い将来に向けての計画、現在の経済状況下で
の見直し、②協力会員校への対応(平成9年
度の会費と利用料金の据え置き、協力会員校
学長会議)の企画など、③「交友館」のあり
方をハウスの事業の魅力の一つとするための
方策。

就業規則改正案の最終点検と承認。
マレーシア政府派遣留学生の冬期・長期滞
在('97年1、3月の第3期生は97名)の利用
料金への特別措置。

平成8年度
第2回共同セミナー委員会

'96年10月15日/アイビーホール

【出席者】宇波彰、伊藤正直、野崎昭弘、佐伯
胖、宮島喬、山中速人、以上6名

【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議題

第15回大学院共同セミナー「ゲーム理論の
新しい展開」の実施報告、第170回大学共同セ
ミナー「ハリウッド帝国の世界像」、第171回大
学共同セミナー「絶滅論」、第172回大学共同セ
ミナー「考える楽しさ―あなたの頭を柔らかく
する(仮題)」、第173回大学共同セミナー
「新しい映画史へのアプローチ(仮題)」、第174
回大学共同セミナー「平和論(仮題)」、第175
回大学共同セミナー「都市と視線(仮題)」、
第176回大学共同セミナー「企業社会とジェン
ダー(仮題)」の準備状況、他。

平成8年度

大学教員研修プログラム委員会

▼第2回'96年10月14日/アイビーホール

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、佐々
木一也、中田良平、山内正平、蠟山道雄、小
林志郎

【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議題

平成8年度大学改革推進等経費の現況、第
12回大学教員研修プログラムの実施報告、座
談会「カリキュラムとは何か」について、第
13回大学教員研修プログラムの企画、他。

▼第3回'96年11月16日/大学セミナー・ハウ
ス

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、井下
理、亀山純生、佐々木一也、建部正義、宮腰

賢、山内正平、蠟山道雄、小林志郎、丹羽泉
【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ2名
●主な議題

第13回大学教員研修プログラムの準備状況、
第13回大学教員研修プログラムの運営、次年
度大学改革等推進経費の担当校、新版FDハ
ンドブックの編集、他。
なお、座談会「カリキュラムとは何か」を
同時に開催した。

千人会

'96年9月～11月

- ◆ご入会ありがとうございました
- ◆兵頭圭介殿・大東文化大学助教/B
- ◆土屋英司殿・広島電機大学教授/B
- ◆岸良範殿・埼玉医科大学短期大学助教
/A
- ◆大瀧祐子殿・主婦/B
- ▼会員数二一、四二九名

◆会費ありがとうございました

- 合田周平、鹿島健次、岡村文子、沖塩莊一郎、
- 下田弘、村上陽一郎、村田光二、朽津耕三、色
- 川大吉、井手久登、松瀬貢規、稲田拓、八幡
- 義博、石村善助、林勲、木村宗男、釜沼善一、
- 進藤榮一、小沢重男、榎林博太郎、石黒哲郎、
- 大澤綱一郎、奥田眞丈、出居茂、並河一、平
- 野健一郎、増田茂樹、小林祐子、松田武彦、田
- 中栄、小堀桂一郎、柴田勇造、古屋野正伍、松
- 本宏、藤田淑子、谷俊治、品川孝次、松田徳
- 一郎、田端光美、大口勇次郎、吉本昌司、大
- 東百合子、三和治、安嶋彌、吉原健吾、岡野
- 澄、尾形憲、飯田恵、関口利男、井上孝、末

おたより

●この3月末東京工芸大の学長を退任致しま
したが、現在引き続き顧問として勤務致して
おります。(田中栄)

●この9月80歳となります。まだフルタイム
の職に就いていますが、東女大や都立大にい

- 松安晴、朝倉孝吉、青柳清孝、関本昌秀、鈴
- 木俊和、小川智哉、東壽太郎、増田四郎、佐
- 藤豪、兵頭圭介、今井淳、平澤茂一、大竹誠、
- 藤永保、矢吹晋、滝口亨、遠藤卓郎、高村多
- 賀子、神田信夫、久武雅夫、飯田経夫、塩見
- 利夫、久場嬉子、天利長三、新田悟、田村献
- 松岡八郎、江藤一洋、松田千鶴子、板垣與一、
- 井門富二夫、小林善彦、長松昭男、篠寄啓助、
- 野崎昭弘、平野敬一、宮田登、江尻美穂子、斎
- 藤信房、戸田盛和、森玲子、酢屋善元、井関
- 利明、坂野観司、木村富夫、横山実、小田中
- 敏男、堀光男、友部直、荒川幾男、末岡俊二、
- 貝塚爽平、前川真理、大貫一、森岡清美、稲
- 垣寛、宮野彬、川原栄峰、佐藤東洋士、宇野
- 重昭、伊藤清子、牧内操、福田隆義、正路徹
- 也、石橋秀雄、末永國明、田島澄江、鶴岡義
- 一、秋田成就、太田時男、川鍋正敏、鈴木順
- 子、角尾稔、赤木愛和、八木江里、齊藤孝、山
- 田耕司、伊藤玄三、池上秋彦、祖父江孝男、久
- 留都茂子、坂田長生、小田滋、清水護、小川
- 捷之、八戸信昭、梶木隆一、木畑洋一、田村
- 光三、木下是雄、大瀧祐子、青木生子、國分
- 康孝、大島葉子、篠沢公平、吉沢英子、小林
- 澈郎、栗田寛、水野伝一、森田信義、熊川忠、
- 山下幸夫、五十嵐香、戸張よし子、近藤保、若
- 林俊輔、納富照枝、今井哲哉、新城信枝、井
- 上信子、笹島恒輔、米満澄、黒羽亮一、福井
- 憲彦、村井資長、城謙輔、小松八郎(敬称略)

た時のように貴館を利用していただく機会がありません。近く院生と共に利用すべく思索中です。
 (常磐大学教授・古屋野正伍)

●長らく納入していない時期があったと思いますが、それは単なる「物忘れ」によるものだと思います。ご容赦下さい。なお、小生の現在の職は、過去、何度か転動しましたが、専修大学法学部教授です。
 (品川孝次)

●学芸大を定年で退官し、コロナ一嵐山郷に勤めてから3年目になります。障害者の純粋な心に触れる毎日で、本当に心洗われる思いです。
 (谷俊治)

●私は今年3月東京外国語大学を定年退官し4月から日本大学文学部に勤務しております。
 (松田徳一郎)

●今年は喜寿ですね、とほかの方々覚えていて下さるので恐縮していますが、本人はあまりそれらしくなく、益々公私共に忙しく暮らして居ります。
 (明海大学学長・大東百合子)

深い感謝と共に

哀悼を捧げて

当ハウスの心と活動の基盤を共におつくり下さり、その活動を長い間お支え下さった方々のご逝去に深い感謝と追悼の心を捧げます。千人会発足以来、三十年近く会の活動を支え続けて下さった方々、共同セミナーで集う学生に大きな感銘を、そして記念行事でお



ナ一体図が、折につろがれる大塚久雄氏
 ナ全図が、折につろがれる大塚久雄氏
 ナ全図が、折につろがれる大塚久雄氏

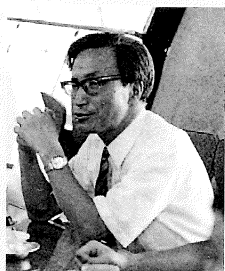
●社会人といえども一生「学生」のような気分でも向上意欲を持ち続けたいと思っております。また、興味のあるセミナーがあれば参加したいと思っておりますので、どうぞ声をかけて下さい。
 (外交官補・吉原健吾)

●元気でやっています。国際基督教大学を定年退職し、この4月から京都文教大学に勤めています。
 (青柳清孝)

●一昨年の九死一生の体験よりなんとか無事に古稀を迎えることができました。
 (武蔵大学教授・今井淳)

●自然と年老い、筑波大・桜美林大二校の名誉教授にいただき、いまは愛知学院大に客員教授として新幹線通勤をしています。セミナー・ハウスにも足遠くなりそうなのが残念。
 (井門富一夫)

●秋冷の候となりました。益々のお元気で活躍の段慶賀の至ります。お陰様で本日、無事満88歳となりました。ご鄭重な米寿慶祝のメッセージを有難く拝受致しました。幸いに



ナ全図が、折につろがれる大塚久雄氏
 ナ全図が、折につろがれる大塚久雄氏
 ナ全図が、折につろがれる大塚久雄氏

姿に接する者の心に「何か」を残して下さい。先生、ハウスを愛しその讃歌をお作り下さった方などと思ひ出はつきません。

最近逝去された方々

- 95年 1月 梅村 魁氏
- 4月 武澤信一氏
- 7月 田原虎次氏
- 8月 吉田公保氏
- 9月 宗像元介氏
- 96年 1月 布川角左衛門氏
- 4月 森田桐郎氏
- 7月 大塚久雄氏
- 8月 丸山真男氏
- 11月 平澤 薫氏

病氣らしい病気もなく元気に毎日を過ごしております。(二橋大学名誉教授・板垣與一)
 ●しばらく田舎暮らしをしてみました。結局東京へ舞い戻ることになりました。

●66歳になってもまったく高齢者という気分がしません。その年、その年になって違う人生が見えるようです。
 (成蹊大学学長・宇野重昭)

●1年前から、来世紀に「生きる」ことを支えるための大科学百科事典(全48巻、英文、LONDON)の編集に携わっています。
 (前横浜国立大学学長・太田時男)

●昨年度は10月〜3月まで短期海外研修でアメリカに留学しており、失礼いたしました。また本年も学会開催校の責任者として、多忙にいたしております。
 (大東文化大学教授・鈴木順子)

●9月中仕事でミュンヘンにりましたが元気でです。
 (東洋大学教授・八木江里)

●明年1月31日から2泊3日、記念館で赤木ゼミの合宿をします。1年下の学年もお世話になりたく存じます。
 (創価大学教授・赤木愛和)

●63歳の誕生日を迎えました。入院加療が必要な部分が生じたので、12月には手当てをし、来年から、再出発しようと思っています。春にはセミナー・ハウスに参りたいです。
 (法政大学教授・伊藤玄三)

●小生は86歳になりますが、どうにか無事で「英語検定」などの仕事を続けています。幸い4人の孫たち全部が社会人になり、ひ孫も2人になりました。
 (東京外国語大学名誉教授・梶木隆一)

●ELECの方、何とか再起したいと苦心しております。その間専務と一緒に御挨拶に上がろうと存じながらまだ果たさず申し訳ございません。(英語教育協議会理事・清水護)
 ●毎年こうして、千人会のお仲間として、参

加させていただけの幸せに存じます。ただいま、私りの本業にいささか専念しております。
 (日本女子大学名誉教授・青木生子)

●今年は7月下旬ワルシャワで1週間国際会議に出席した後、ハンブルグの研究所DESYで夏を過ごしました。理論の友人たちと議論し、進行中の実験について実験家からいろいろ教えてもらい、久々に緊張感を取戻した思いでした。この研究所を初めて訪れてから30年になります。平均すると3年に一度くらい、夏の間滞在させてくれるhospitalityには本当に感謝です。変らぬドイツの友人たちの厚情に報いること少なきを恥じております。
 (福井工業大学教授・小林淑郎)

寄付

96年9月〜11月

〈一般寄付金〉

二二、一〇〇円 東京大学教授平野健一郎殿

〈植樹〉

いとひば一株 七セミナー・ハウスパート職員

飯島吉雄殿

〈現物〉

スライド「ハウスのキャンパス(建物)」40枚

(説明文付) 東京都立川短期大学名誉教授 吉田幸弘殿

寄贈図書

96年9月〜11月

『現代に生きるファウスト』 小西 悟殿
 『地方分権と地域政治』 山梨学院大学殿

夏の終わりから晩秋にかけての3ヵ月間の宿泊利用者は一万一、一六八人。計231のグループは「利用状況」(15〜16頁)にご覧いただく通りであるが、その中からこの「通信」では、ハウスで行なわれることの多い建築学関係のセミナー、そして9月1日までの1週間の日程で開催された本格的な国際学会「国際比較体育スポーツ学会」にスポットを当ててみた。

●ハウスの建築群を教材として

「大学セミナー・ハウスの建築群を見て良い建築とは何かを考える」——これはある建築学科のゼミのテーマである。建築を設計する時、完成後の省エネや維持管理、運営のしやすさなどは不可欠の要件である。しかし、もしこのセミナー・ハウスが大きなビルタイプだったなら、私たちは八王子まで来ただろうか。この地で自分が設計するとしたら、その辺の兼ね合いをどうするか——建築とは何かを考える上で、ハウスの建築群はまたとない教材を提供してくれる、というのである。

年間を通して、ここでの合宿を続ける建築学関係のセミナーはかなりの数になる。この秋3ヵ月を見渡しても①芝浦工業大学建築学科八王子ゼミ②前橋市立工業短期大学松井淳研究室③早稲田大学渡辺仁史研究室④東京理科大学建築計画ゼミ(沖塩莊一郎教授)⑤日本建築家協会「建築セミナー」⑥吉阪隆正シンポジウム⑦東京電機大学八木澤壯一研究室——

わたしたちの合宿

学生のテーマをいかに

研究レベルに高めていくか

——セミナー・ハウス建築卒論合宿——

東京電機大学教授 八木澤壯一

セミナー・ハウスをはじめ訪ねたころはハイキング気分でした。東京電機大学に赴任してからも、建築学科の新入生の歓迎会では吉阪研究室の方に講演をお願いしました。学生には建築を実感してもらうために、各自が泊まった宿舎を図で表現してもらいました。また民家や町並み調査の予備練習として卒業生を対象に泊まりがけで遠来荘を教材につかわせていただいたこともありました。

東京電機大学では卒業設計を必修にしていますが、卒業論文は学生にも教師にも自由をと、しかもレベルを上げようと選択にしています。大学らしい学習の場であると私は考えていますので、学生の取り組んでみたいテーマをどう研究的なレベルに高めていくかが大学教師の職人的訓練の場ととらえ、全員ひきうけてきました。

などを挙げる事ができる。そして、そのいづれもがこの丘の建築群を何らかの意味で教材としてきている。ちなみに、学生時代に自身がここで得たと同様の体験学習を、今ご自分の学生たちにも分かとうとしている「ハウス第二世代」の教師も少なくない。上記②の松井淳先生、③の渡辺仁史先生などがこれに当たる。

●生活に密着した課題に取り組む

東京電機大学建築学科八木澤研究室の41名が晩秋11月下旬に2泊された。十数年来続いている恒例の「卒論合宿」である。ここでも学生たちにとって各自が泊った宿舎や遠来荘などが教材となった。

テーマは、生と死を考える火葬場やどう学習し育つかが課題の学校など、生活に密着した施設を対象に、建築に求められる本来のニーズの発掘、それが実現して行くためのプロセスの探求です。学問領域でいえば、建築計画と建築経済になります。研究の手法は施設の実態や歴史的経緯などフィールドワークが主体になっています。

今年は学生数も多かったこともありましたが、なんと40人を超える希望者になってしまいました。テーマの設定や指導態勢に苦慮しました。これまでも他の大学や研究所の人達をはじめ、設計や計画の実務者との協力につとめてきました。そのなかで萌芽的なテーマの拾い出しに心しています。国立医療施設管理研究所、東海大学との協力で、死をみとる場所の研究をはじめました。また世田谷区、都立大学の都市科学研究科の人達と、地域に密着した地区会館の在り方を探りはじめました。学生にも病院や老人施設でのボランティア体験を通しての課題の発掘を勧めているのも、世の中に「師」を求めていることです。

野猿峠に紅葉と落葉がみられる時期に、ここセミナー・ハウスに数十台のパソコン周辺

「生活に密着した施設の設計や計画」が一貫して同研究室の基本テーマである。だからその研究対象は学校などの教育施設から葬祭施設にまで及ぶのである。死は誰もが現実と直面するとわかつてはいるながら、死をみとる場所である病院や老人施設、さらに火葬場や葬儀場などは、なぜか誰も直視したくない。人の一生の最後にふさわしい葬送のための空間はどうあったらいいのか。学生たちは、これらの施設でのボランティア体験を含むフィールドワークを通して、卒業研究の課題の発掘につとめるのである。

二年前の同じ季節、ハウスにとって忘れられない出来事があった。国際セミナ

機器と研究室の大移動です。二泊三日が恒例となつている「卒論合宿」の始まりです。それまでの調査結果などを、どうまとめていくかを院生も加わり、深夜まで議論が続くことになりました。今年で15年続いたと聞き、感慨深いものがあります。



パソコン数十台が導入されたセミナー室。それぞれが体験を通して発掘した卒論のテーマに取り組んだ。(96.11.22/大セミナー室)

「館入口近くの談話室でのボヤである。そして忘れてはならないのは、その夜隣接の宿舎に滞在していた八木澤研究室の方々の初期発見、119番通報、さらに火気拡大防止の処置などの一連の迅速かつ適切な対応が大事を小事にいとめてくれたこと。そして、同研究室の学生たちの日頃の体験学習とそれに裏打ちされた実践の本領が、その場でもいかに発揮されてきたことである。以来、晩秋の頃にはこのことを思い、八木澤研究室への感謝の念を新たにしているのである。

本号の「わたしたちの合宿」(右掲)には八木澤壯一教授に一文をお寄せいただいた。

人的交流があって学術的な議論も深まる

—第10回国際比較体育スポーツ学会—

慶応義塾大学教授 近藤明彦

1996年8月26日から9月1日までの7日間にわたり14カ国、約70名の参加者を集めて開催された国際比較体育スポーツ学会 (ISCPES) は、1978年イスラエルのウインゲート体育研究所で行なわれた第1回比較体育スポーツ国際セミナーにおいて発足した。本会の目的は、体育・スポーツに関して、特に社会科学・人文科学・教育学の観点から、大陸間・文化間・国家間・国家または文化を含む地域間における比較を重点とした研究・学究的活動を奨励・促進・援助することにある。

今回の大会は「文化の中の体育・スポーツ、東西の相違点と一致点」というメイン・テーマのもとに行なわれた。大会はさらに「スポーツ・フォー・オール」、「スポーツビジネス&マネジメント」、「スポーツにおける比較文化研究」、「スポーツと環境」、「体育・スポーツ教育学」の五つのメイン・トピックスに分かれ、計42題の発表が行なわれた。

ひとつの発表演題には30分間の時間が割り当てられた。これは日本国内の体育・スポーツ関係学会での発表時間の2倍から3倍に当たるものであり、発表後のディスカッションも十分行なわれた。さらに、連日、夕食後も交友館や全館貸し切りとしたセミナー・ハウスの宿舎内では、夜遅くまで発表のテーマや新たな研究課題についてのディスカッションが続けられていた。これもひとえに大学セ



環境・文化・宗教も異なる14カ国・約70名の参加者たちが熱心に研究発表に聴き入った。(’96.9.1/講堂)



大学・専門分野・所属学会等を超えてチームワークを発揮した運営委員諸氏——後列右端が近藤明彦教授。(’96.9.1/本館正面入口)

ナー・ハウスという地の利を得たことによると思われる。通常の学会においては、ここまで踏み込んだ議論はなかなか出来ないものである。

アマチュアリズムの語がほとんど死語と化した現在、スポーツはもはやマスコミの影響抜きでは語れなくなり、商業主義・政治的な意図を分離した純粹さのみを求められなくなりつつある。21世紀を間近とし、すべての価値観が混沌たる現在、体育・スポーツが人類にとってどのような恩恵をもたらすかを探求していく上において、今回の学会が参加者に与えた影響には計り知れないものがあると考える。

東西の冷戦が終結した後も引き続き起こる数多くの異民族・異宗教等が原因となる地域紛争が続く現在、また、インターネット等の情報伝達手段が発達して全世界がますます狭くなりつつある現在、体育・スポーツという主題に限定された学会ではあるが、その育った環境・文化・宗教も異なる各国の参加者が7日間にわたり寝食をともにして、国際比較研究という立場からディスカッションを繰り返すことにより学術的交流・人間的交流を深められたことには深い意義があると考えられる。

今後、このような国際会議は数多く日本国内で行なわれるであろうが、参加者の真の意味での人的な交流が出来て初めて学術的な議論の理解が深まるものと考えられる。大学セミナー・ハウスはこのようなチャンスを与えることが出来る国内の数少ない施設の一つである。今後もこのような国際学会やシンポジウム、ワークショップ等の開催場所として、大学セミナー・ハウスが有効に機能することを望んでやまない。

● 久々に迎えた本格的な国際学会
 欧米、アジア、オセアニア諸地域14カ国からの大学関係者ら約70名が1週間合宿し、熱心に研究発表・討議を続けた国際比較体育スポーツ学会は、ハウスが3年ぶりに迎えた本格的な国際学会であった。同学会は78年発足以来2年おきに世界の主要都市で行なわれてきたが、日本では初開催。記念すべき第10回大会でもある。ハウスでの実施を積極的に推進されたのは学会事務局長で筑波大学教授の市村操一氏。2年ほど前から下見と打合わせで幾たびか来館し、準備を進められた。市村氏とハウスとのご縁は20年近くも前に遡る。78年9月、国際体育スポーツ史東京セミナーがハウスで開催された。国際セミナー館が建設されて3ヵ月後に迎えた、ハウスにとって初めての大規模な国際集会であった。各国の参加者からは、この丘の自然の中での「合宿」から生まれる温かな人間的交流が、学術的な厳しい議論を交わす上に不可欠な共通の基盤を創ることに寄与していた、と高い評価が寄せられた。市村氏は同セミナーの運営委員の一人であられた。

幸い今回も、都心のホテル等を会場とした場合には得られなかったであろう効果を指摘する声を聞くことができた。1週間の「山籠り」ではあったが、歓送迎の両夕食パーティー、富士山へのバス旅行、夕刻のサッカーゲーム、さらに夜の交友館でのくつろいだ懇談——などの交歓の機会もあり、「都心からの隔絶」への不満は全くなかったという。

何よりも大学・所属学会等を超えた運営委員諸氏のチームワークぶりが感銘深い。そのお一人で、慶応義塾大学体育研究所教授の近藤明彦氏に同学会の成果の一端をご紹介いただいた(上掲)。

利用状況

96年9月、11月
*11月2回利用
日帰りを除く

9月(119グループ、延六、二一〇人)

Table with multiple columns listing university names (e.g., 埼玉大学, 中央大学, 法政大学), professor names, and their respective institutions.

- List of research activities and seminars including: 八千代国際大学助教授, 山口 桂子, 東京理科大学助教授, 酒井由紀代, 立正大学助教授, 松原 達哉, 産能大学助教授, 根来 龍之, Y M C A 健康福祉専門学校社会体育科, Y M C A 健康福祉専門学校社会体育科, Y M C A 健康福祉専門学校社会体育科, Y M C A 健康福祉専門学校社会体育科.

- List of seminars and research activities including: 1合宿研修, 関東信越地区国立高等専門学校技術職員研修会, 一橋大学助教授, 安川 一, 中央大学講師, 勝村 誠, 中央大学学生相談室, 中央大学学生相談室, 武蔵大学講師, 杉井 純一, 専修大学助教授, 萩原 稔, 中央大学助教授, 萩原 稔, 中央大学助教授, モジユタバ・サドリア, 早稲田大学講師, 早田 宰, 早稲田大学フランス会, 早田 宰, 順天堂大学第31回病院業務改善セミナー, 順天堂大学第31回病院業務改善セミナー, 東海大学助教授, 師岡 孝次, 日本大学落語研究会, 早稲田大学助教授, 渡辺 仁史, 早稲田大学助教授, 藤井 良治, 早稲田大学コンツェルト, 早稲田大学コンツェルト, 中央大学川原彰・帝京大学明田ゆかり合同ゼミ, 中央大学川原彰・帝京大学明田ゆかり合同ゼミ, 東京理科大学助教授, 沖塩 一郎, 中央大学助教授, 洪谷 勉, 東京大学助教授, 内田 慎一, 日本獣医畜産大学助教授, 松木 洋一, 共栄学園短期大学英語学科秘書専攻, 大月短期大学助教授, 大柴 建一, 創価大学社会学科5ゼミ, 山梨学院大学助教授, 上野 敦男, 大月短期大学助教授, 村越 洋子, 国士館大学講師*, 石川 博明, 第33回大学教員懇談会, 動物の科学スチューデントフォーラム, 第170回大学共同ゼミナー, 国際教育交流協会, ルソール合奏団, 開発教育協議会, 日本建築家協会関東甲信越支部, 日本ナザレン教団教会学校部, 女性と地方自治を考える会, アカー, 吉阪隆正シンポジウム.



芝浦工業大学「八王子建築ゼミ」の参加者としてハウスに再来したマレーシア政府派遣留学生の2人（昨年冬受験準備で長期滞在した）。夕食懇親会で石黒哲郎教授（右端）らと歓談。（96.9.11/食堂）

中央大学教授 栗林 世
 アイセック早稲田大学委員会
 法政大学助教授 菅沢 龍文
 桜美林大学教授 大木 昭男
 桜美林大学教授 井上 雅雄
 早稲田大学教授 浦野 正樹
 中央大学教授 田中 拓男
 中央大学教授 細野 助博
 東京電機大学教授 八木澤壯一
 早稲田大学助教授 後藤 春彦
 早稲田大学教授 森 元孝
 桜美林大学教授 永瀬 順弘

慶応義塾大学助教授 古石 篤子
 横浜国立大学教授 鳥居 昭夫
 筑波大学教授 駒井 洋
 東京理科大学教授 狩野 紀昭
 白梅学園短期大学教授 高橋まゆみ
 日本女子大学附属高等学校
 東京神学大学全学修養会 速水 昇
 富士短期大学教授 若林 俊輔
 都留文科大学教授 上野 敦男
 山梨学院大学教授* 若林 俊輔
 国立学校技術職員研修会
 世界天才会議

大学教員研修プログラム委員会・座談会
 第23回国際学生セミナー
 世田谷市民大学政治ゼミ
 日本小児神経学会
 多摩ニュータウン・キリスト教会
 日本聖公会八王子復活教会
 キリスト兄弟団黒教会
 開発教育協議会
 東村山サンライズチャペル
 日本ルイス・キャロル協会
 大阪からだところの出会いの会

ヒューマンライフセンター
 日本精神科看護技術協会
 東京都レクリエーション協会
 運動機能研究会
 日本おもちゃ会議
 FGBMFI埼玉戸田支部
 清水建設/コロンビヤ貿易/日本ビ
 ー・オー・ピー広告協会/エム・エ
 ス計算センター/カイジョー/ソー
 テック/アネルパ/コニカ/ジェ
 イ・アール・シー特機

開催予告

●第172回大学共同セミナー●

考える楽しさ—あなたの頭をもっとやわらかくする—

1997年3月7~9日(金~日、2泊3日)

大学とは、ただ知識を身につけるのでしょうか。でも知識はすぐに古くなるし、教科書どおりの方法で解ける問題は現実にはそれほど多くありません。はじめて立たされた状況で、はじめて出会った問題をどのように解決するか—その能力を育てるのがほんとうの大学ではないでしょうか。世の中では、知識をただ「もっている」ことより「活かす」こと、またときには「やわらかい頭で、新しい道を切り開いてゆく」能力が要求されるのです。

最近、教科書の問題が解ければいい、答を覚えてしまえばいいという若者が増えてきたといわれています。もしそうだとすれば、なおさら「やわらかい頭の若者」は尊重され世の役にたつでしょう。それに借りものでない自分のほんとうの力を発揮することは、とても楽しいことです。このセミナーは、柔軟な発想を育てること、「自由に考えることの楽しさ」を理解していただくことを目指して企画しました。文系・理系、成績を問わないおもしろいセミナーをみんなでいっしょに作り上げましょう。

◆主題講演

大妻女子大学社会情報学部教授 **野崎昭弘氏**
(運営委員)

◆特別講演

東海大学教育研究所教授 **中村義作氏**

◆セッション

I 「わかる」段階

大妻女子大学社会情報学部教授 **野崎昭弘氏**

II 体力、知力、発想力を総動員—発想物づくり大会—

東海大学教育研究所教授 **秋山 仁氏**

III 発想は考える楽しさを倍増する

東海大学教育研究所教授 **中村義作氏**

IV 「やわらかい頭」にするために

大学セミナー・ハウス館長 **岡 宏子氏**

定員：50名／申込締切：2月18日／対象：大学生・短大生・社会人／参加費12,000円(社会人15,000円)

●問い合わせ先

大学セミナー・ハウス企画室 TEL 0426-76-8532
 FAX 0426-76-0266

●館長室から●

人が生きていくということについて、いろいろと考えさせられることの多いところだろう。

「aging」は誰もが体験しなければならぬ問題ですが、それに伴う生命現象とどうつきあうかについては、間もなく八十歳を迎える身には年毎に現実味を帯びたものになってきています。

そんなところへ共同セミナーでは「絶滅論」(次号の報告となります)が、宇宙の時空のスケール、生命の誕生、はては人類の……と何億、何千万年の時空のスケールの話の中に身を置くと、百年に満たない人の命の刹那さを思い知らされたりもします。

この二年、セミナー・ハウスの心と活動の恩人の先生方のご逝去の報(12頁にご報告)に心をえぐられる思いをしながら、フツと女学生のころ教科書にあった英詩を思い出しました。

*The lives of great men
 all remind us, we can
 make our lives sublime:
 departing leave behind us
 footprints on the sands of
 time.....*

たとえ宇宙規模から見れば刹那的な数十年であろうと、人の生きることの重さと大きさを思います。「巨星墜つ」の衝撃を生きる人々に与える偉大な生命でなくても、せめて「生きている間は生きて」と口ぐせになっている言葉をつぶやいて(岡)